
隣の家族

輝 美津夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣の家族

【Nコード】

N10660

【作者名】

輝 美津夫

【あらすじ】

とあるマンションに引越しをしてきた河原洋平たち4人家族。隣には優しそうな主人と、奥さん、娘さんで暮らしているらしい。しかし、隣の主人とはよく会うものの、奥さんと娘さんを見かける事はなかった。ある日、隣の主人が救急車で運ばれた。そして、奥さんと娘さんの真相が明らかになる。

河原洋平は、転勤のため4人の家族と共に、横浜市内にあるマンションに引越してきた。タンヌ等の大きいものは引越屋の人により、ほとんど定位置に置かれていたが、細かいものを詰め込んだダンボール箱は、各部屋に山積みになっている。それが面白いのか、小学生の子供たちはかくれんぼを楽しんでいる。

「とりあえず荷物の整理は少しずつやっていくとして、隣の人へ挨拶に行ってくるか」
と、洋平が妻の真希子に言った。

河原の部屋は、階段の踊り場を挟んだ右側の303号室になる。

真希子が挨拶用の手土産を片手に、4人は304号室の玄関前に行き、洋平がドアホンのボタンを押した。しばらくすると中から鍵を開ける音が聞こえ、玄関のドアがゆっくり開き、中から人の良さそうな50代後半くらいの男性が出てきた。

「本日、隣の303号室に越してきました河原と言います。名古屋から来まして、この辺の事はよくわからないものですから、いろいろとお尋ねするかもしれませんが、よろしくお願ひします」
と、304号室の男性に挨拶用の手土産を渡しながら、洋平が言った。

「あー、それは遠い所からご苦労様でした。今、妻と娘は外出していますので、帰ってきたら伝えておきます。私は増田といいます。こちらこそよろしく」
と増田は笑顔で答えた。

河原たちはその日の夕方、引越しの疲れと部屋がまだ片付いていないため、近くのそば屋で夕食をとる事にした。

「隣の増田さん、優しそうな人で良かったわ。隣に住んでいる人が

感じの悪い人だったらどうしようかと思っていたの。隣の人によつては私たちの生活にも影響するから」

と、真希子は洋平に言った。

「そうだなあ。歳は60前つてところかな。ということは娘さんと言つても立派な社会人なんだろうな。奥さんと娘さんと生活をしている極普通の幸せな家族つていう感じかな」

「5年生くらの子がいればよかつたのにね」

と真希子が小学校5年生の息子の翔太に言った。

「うん。でも学校に行けば友達なんかすぐできるよ」

と、翔太が言った。

ちようどその時、注文したざるそばが来たので、4人はそばを食べ始めた。

引越しから1週間が経ち、部屋もある程度片付いてきた。しかし、その間に溜まつたゴミがたくさん残っている。明日の月曜日は可燃ゴミの日なので、たくさん出す事になるだろう。

洋平たち4人は近くの大型スーパーに夕食の買い物に出かけようとして、玄関を出た時、スーパーの袋を持った隣の増田が、階段を上がつてきた。

「こんにちは」

と真希子が増田に言った。

「こんにちは。お買い物ですか。私たちも買い物でしたが、妻と娘は花屋に行つて来るとかで、私だけ先に帰つてきました」

と増田は言った。河原たちは、増田に軽く会釈しながら買い物へと出かけた。

翌朝、真希子は洋平と子供たちを送り出した後、大量のゴミを捨てるため玄関を出ると、

「じゃあ、行つて来るね」

と、中にいる奥さんか娘さんに言いながら、普段着を着た増田が花

束を持って玄関から出てきた。しかし、部屋の中からは「行つてらっしゃい」の返答は聞こえなかった。

「おはようございます。」
と真希子が挨拶をした。

「ああ、おはようございます。今日はいいい天気になりそうですね」と増田も真希子に挨拶を言い、玄関の鍵を閉めて、大通りへ向かつて歩いていった。

真希子は、増田が普段着で花束を持っていたのを不思議に思ったが、花に関係する仕事でもしているのだろうと思い、特に気にはしなかった。

ある日の夕方、真希子が買い物から帰ってくると、隣の増田がちょうど玄関を出るところだった。

「こんにちは」
と真希子が挨拶をすると、

「こんにちは。今から妻と娘の3人で食事に出かけるところなんですよ。今日10月16日は娘の誕生日でしてね」と増田が言った。

「それはおめでとございます。娘さんはおいくつになられるんですか」

と真希子が訊いた。

「今日で25歳になります」
と増田は笑顔いっばいで答えた。

「奥さんと娘さんは先に行かれてるんですか」
と真希子が訊くと

「いやあ、すぐ後ろからついて来ますよ」
と304号室のドアを見ながら増田が言った。

「それでは楽しい時間を過ごしてくださいね」
先に旦那さんだけ出かけて、どこかで奥さんと娘さんと待ち合わせをしてから食事に行くのだろうと思い、そのまま玄関に入った。

それから1ヶ月が経ち、息子の翔太も娘の真由も小学校に慣れてきて、友達とも仲良くできているようだった。洋平も転勤先での仕事も順調にこなしていた。ただ、この1ヶ月間、隣の旦那さんにはよく会うものの、奥さんや娘さんに会う事はなかった。

そんなある日の夜、救急車が河原たちのマンションの前で止まり、2〜3人で階段を駆け上る音が聞こえ、やがて隣の増田の部屋のドアホンが鳴った。

「増田さん、大丈夫ですか？救急隊です」

という声が聞こえたので、真希子は玄関のドアを開けた。増田の部屋の鍵は開いていたので、救急隊はドアを開け入っていった。10分位してから担架で増田が運び出されて来た。

「どうしたんでしょうか」

と真希子は救急隊に言った。

「胸が苦しいという連絡があつたんですが、部屋に入った時は居間で倒れていました」

と、救急隊は早口で真希子に言い、急いで階段を降りて行った。

幸い命に別条はなく、真希子は3日後に増田が入院している病院へお見舞いに行った。

「河原さん、ありがとございます。申し訳ないんだが、鍵はここにあるので、私の部屋に行つて妻と娘に水をあげてくださいませんか」

「お水ですか？」

「はい、行けば解ると思いますので。それから花瓶の水も取り換えてもらえませんか」

と増田が真希子に鍵を渡しながら言った。

真希子はどういふ事なのかわからないまま、マンションへ帰り、増田の部屋のドアを開け、居間へと入っていった。しかしそこには誰もいなかった。その直後、真希子は事情を知った。居間の正面に仏壇があり、奥さんと娘さんの写真が飾ってあった。2009年1

0月16日没と書いてあった。真希子は水を入れたコップを仏壇に置き、手を合わせた。

後から聞いた話によると、昨年、奥さんと24歳になる娘さんが、娘さんの誕生日祝いのための花を買いに行く途中、居眠り運転のダンプカーにはねられ、2人とも即死したのだという。

家族を愛していた増田は、2人の死が受け入れられず、今でも一緒に暮らしている空想で生活していたのだ。そして毎週月曜日になると、事故現場である大通りの交差点に、花を取り換えに行っているのだという。奥様と娘さんが亡くなった1ヶ月後、増田は会社を辞め、毎日毎日家族3人で過ごしている事で、悲しみから逃れているのだという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1066o/>

隣の家族

2010年10月10日00時09分発行